

Y07a アストロバイオロジー教育のすすめ I. 小学生に対する教育効果

村山 真紀 (立教大)、成田 憲保 (東大)、奥田 郁美 (東海大)、藤田 大悟 (東工大)、本郷 奈央美 (横浜市大)、佐藤 桃子 (農工大)、西山 哲史 (筑波大)、木村 かおる (科学技術館)、石井 雅幸、福田 章人 (東京都・九段小)、丸 幸弘、長谷川 和宏 (株式会社リバネス)

近年、子どもたちの理科離れという言葉がよく聞かれるようになり、その問題意識のもと理科教育のより一層の充実を求める提言が、天文学会を始め各分野・地域の理科教育系学会で取り上げられている。こうした中で、最先端の科学をわかりやすく子どもたちへ伝える「科学コミュニケーション」と呼ばれるような活動の必要性は、この問題に取り組む多くの方々の共通した認識である。

私たちは昨年度から、科学技術館と東京都九段小学校の主催する放課後を利用した「子ども天体観察教室」において、小学校5,6年生を対象とした「アストロバイオロジー教室」を実施している。アストロバイオロジーは、日本における知名度はまだ低いが、天文学や生物学を始め多彩な研究分野の横断的な学問であるため話題が豊富であり、また、「いのち」というひとつのテーマに対して複数の科学的な視点から見るという体験ができる点が、科学を伝える教材として好ましい。特に今年度の教室では、「いのちって何だろう？」を教室の主題として、生物学的な視点、地球惑星科学的な視点、天文学的な視点から「いのち」を知り、考える教室を行った。

本講演では、2年間にわたる小学生に対するアストロバイオロジー教室を通して、子どもたちに伝えたかったこと、伝えられたこと、見えてきた今後の展望と課題について報告する。また本教室のもうひとつの特徴として、天文学・物理学・生物学を学ぶ大学院生・大学生が企画を作成し、当日の講師およびアシスタントを務める点が挙げられる。学生がこうしたアウトリーチ活動に参加する利点についてもあわせて紹介したい。